



Agarato

すべてのいのちと未来を拓く

すべてのいのちに有難う。

Our School of spark joy



manma_tokimatagi
Instagram

Our natural organic estaurant & cafe



lovetable_tokimatagi
Instagram



Agarato

株式会社あがらと
和歌山県東牟婁郡古座川町三尾川 555
Mail info@agarato.jp Tel 0735-75-0075
Website : <https://agarato.jp>

みんな畑に出ているのでメールでお問い合わせいただくと嬉しいです



Agarato
OFFICIAL



agarato
Instagram



tokimatagi_dewrose
Instagram



dewrose_official
Instagram



Dew Rose
OFFICIAL



Lead the Future with All Lives

すべてのいのちと未来を拓く

人々は今も大自然の中で
すべてのいのちと共に、そ
の一人として生きています。
過剰に奪うことをせず、穢
すことをせず、すべての存
在に感謝しながら。そして
少しでも人の智慧を使い、
手を携えながら、自然と溶
け合うように暮らしている
のです。

一方で、現代の日本に生
きる、多くの人々にとって
自分たちがたくさんいのち
ちと共にあることを実感
することは、難しいのかも
しれません。身の回りには、
便利なものが溢れています。
ずっとたどっていけば、何
かしらの形で、自然の中に
あったものを元に作られて
いるはず。だけれど、高度
な技術で精製され整えられた
結果、人々は、便利さと引き
換えに、何よりも大切な『い
のちの繋がり』を見失いつ
つあるように思えてなりま
せん。

そんな時代に、人と自然に
垣根のない町からできるこ
と。それは『すべてのいの
ちと共に、より豊かなみら
いを拓いていくこと』だと
思っています。すべてのい
のちが皆等しく、自然と共
にあるだけではなく、豊か
な知性と知能を授かった人
間だからこそその役割、古く
て新しい視点や価値を加え、
大自然との間（あわい）の
点を追い求めて『拓いて』
ゆくののです。

人はその智慧をもって、
手をもって、自然が自然の
ままでは起こせないこと、
起こせたとしても時間がか
かることを、効率的に、効
果的に起こし、活用してき
ました。そして、それは本来
人の為だけでなく、人にも
自然にも喜ばしい『何か』
をもたらしてきたのです。
すべてのいのちと共に生
きるとは、そういうこと。



食べる薔薇、DewRose



こんにちは～



Column Vol.1

昔ながらの道具を手作り

すべてのいのちと生きる農業に欠かせない
古き良き道具を復元させています。
田車（写真右下）もその一つ。



Live with All Lives

すべてのいのちと生きる

From Kozagawa Village
Where is No Barrier
Among Human and the Nature

人と自然に垣根のない
和歌山県の山奥から

和歌山県の南のほう

古座川町という山間の町で
私たち『あがら』は活動
しています。東京23区の半
分程の広さで、人口はわず
か2400人程度（202
3年現在）。面積の約96%が
山林で、数々の清流にめぐ
まれた、自然と共生する動物
たちの中に人が住まわせてい
ただいているような集落です。

古座川町には、ないもの
がたくさんあります。信号
機もコンビニもありません。
そして何より、『人と自然の
垣根』がないのです。

鮎やアマゴといった川の
めぐみ、鹿やイノシシ・山
菜といった山のめぐみ、そ
して古くから稲作や林業を
支えてきた、自然のめぐみ。

野菜・米・食用薔薇の3つのめぐみ

あがらとでは、**農薬・化学肥料・動物性肥料を使わない植物性自然栽培**という農法を軸に、3つのめぐみをいただいています。栽培方法についてはこの冊子の中で説明していきますが、まずはそれぞれのめぐみを簡単にご紹介。



01_ 野菜のめぐみ

地域で昔から育てられてきた伝統野菜に、古座川の気候風土と相性の良い西洋野菜を織り交ぜた、多品目栽培を行っています。**（身土不二 / 適地適作）**多品目栽培は、気候変動による収獲量への影響を最小限にとどめるだけでなく、山間の比較的小さな農地を有効活用でき、植物同士が良い影響を及ぼし合います。「自然のことわり・地のことわり」に則した選択。食べ物は、人がたくさんのいのちと共にあることを実感する最も身近で日常的な存在。お野菜を通して、その普遍的な事実を見つめ直すきっかけにもなると良いな・・・と考えています。



02_ お米のめぐみ

古座川町で古くから親しまれた『香り米』を中心に、**手植え・天日干し**といった伝統的な農法を織り交ぜて栽培を行っています。町内でも流通が途絶えていた香り米を復活させる形で栽培を開始。香り米の栽培をきっかけに、町内の先輩方からも指導いただけて、関係性がグッと深まりました。**去年のめぐみを糧に今年めぐみを育む。**そうして、遥か昔から伝え紡がれてきた稲と人の歴史から、人としての在り方を学び、繋がりをを感じる機会にもなっています。



03_ 食用薔薇のめぐみ

薔薇は古（いにしえ）の時代から、人々に愛され親しまれてきた、人との関りが最も深い花の一つです。美しさで人々を魅了するだけでなく、美容や健康面でも様々な効果効能が知られるまさに花の女王。ですが、日本では、薔薇が食べられることはほとんど知られていません。薔薇を味わうという特別な体験から、その育て方や背景、ひいては自然全体のことを考え、感じるきっかけになることを願いながら、**唯一無二の商品をひとつひとつ手作業で作っています（Dew Rose）。**

植物も、動物も、人間も一緒に

“すべてのいのち”には、あらゆるいのちが含まれます。
みらいに向けて、すべてのいのちと共にどうありたいか・・・をロゴマークに込めました。



あがらとの近くにある大銀杏。400年もの間、野生動物や鳥、人にめぐみを与え続けている。

樹木のような羽、葉っぱのような尾の鳥が、少女を乗せてはばたく、あがらとのロゴマーク。このマークは、植物も動物も人間も、すべてのいのちが同じ世界の中で**共にあり続ける**というコンセプトを表現したものです。
より豊かな未来を拓き、贈っていく上昇感や高揚感を、未来へとはばたくイメージに込めました。



| Think How to Be Together with the Mother Earth |
地球からあずかり 還し 未来へ贈る

資源はあずかりもの

人は、ゼロからモノを作り出すことはできません。スマートフォンやパソコン・車、あらゆるものは、地球の資源から作られています。資源は地球からもらったものではなく、あくまで『あずかった』もののはず。

あずかりものですから、大切にするのはもちろんのこと、最終的には地球へ還すか、次の担い手へ贈り紡いでいくものだと。そんな視点で見ると、何をあずかり、あずかったものをどう活かすのか、選択や行動が変わってくるのではないのでしょうか。あがらの選択や行動はすべて、このような自然の理（ことわり）に基づいています。

地球へ還すことまでイメージする

あがらとでは地球から資源をあずかるとき、地球に負担のない範囲で、いつか還すときのことまでをイメージします。

例えば、竹は成長が早く次々と出てくるので、あずかっても自然への悪影響が少ない優秀な地球資源。燃やしたり粉砕すれば、肥料にもなり土に還すことができます。そこで考え出したのが、竹を骨組みに使った竹ハウス。病害虫や害獣除けを目的にした、あがらとオリジナルの栽培用ハウスです。

竹ハウスを作るときは竹に防腐防虫加工を施しますが、古の智慧である柿渋と松煙という自然素材を使い



土に還す際の妨げにならないように工夫しました。土からできている廃瓦を使った水路も、あがらと流の選択です。

何年先になるかわからないけれど、形あるものはいつか役目を終えるときが来ます。初めから、その時のことまで想像を膨らませておくことで、地球からのあずかり物を、きちんと還すことができるのです。

Column Vol.2 放棄竹林解決の一助に

日本各地で、手入れの行き届かない竹藪が荒れて土砂崩れの要因になることも。竹のチカラ強いのちを借りてハウスを建てることは、人と竹との接点を取り戻し、こういった問題の解決にもつながっていくのです。





Earth Resources
Are for Future Generations Too

地球資源とは、今すでに形あるものだけではありません。これから生まれ育っていくもの、そのポテンシャル、姿かたちを変えて生まれ変わる分子・原子まで、すべてが資源です。こういった資源を未来へと贈り紡ぐことは、**今を生きる私たちの役目。**

地球の資源を未来へ贈る

地球の資源を『あずかる』という視点だけでなく、これから育っていく資源を守り、増やし、未来へと贈り紡ぐ視点を持つことで、すべてのいのちと共にみらいを拓いていくためのベースを作っています。



還せないものは次の担い手へ

私たちの身の回りは、簡単には地球へ還せないあずかり物で溢れています。世界中にあふれかえるプラスチックゴミは、その最たる例。あずかり物だという認識を持たず、還すことを

想像せずに、どんどんあずかり続けた結果です。還しにくいものは安易に捨てるのではなく、人の智慧で生かし、次の担い手へと紡いで、できるだけ長く活躍してもらおうのもあがらと流。

竹ハウスを覆うナイロンのメッシュシートは、実は建築現場の足場廃材。野菜畑を囲うナイロンの網は、近郊で使い古された魚網を最利活用したもの。どちらも、十分な強度を保っているが、通常は産業廃棄物として捨てられてしまうのだそうです。

Column Vol.3 実証実験は自然の中で

竹ハウスが現在の形になるまでには、様々な組み方を試し、幾度もの倒壊を経験しています。春一番や台風といった、自然の脅威での実証実験のおかげで、最も強い構造を編み出すことができました。

微生物と仲良しになる

おいしい土に育む

あがらが目指す土とは『山の土』、大自然が何億年もかけて育んできた土こそが理想の土。口に含むと思わず飲み込んでしまいそうになるくらい、『おいしい土』でとても芳ばしいんです。言い換えればそれは、多様ないのちから生み出された微生物がバランスよく共生する土なのです。

農薬や化学肥料は、効率よく均一に一時的に、たくさん作物を育てるには便利なものですが、反面、微生物にとっては住みにくく活躍しづらい環境を作ってしまう要因になります。だから、あがらとでは、農薬化学肥料・動物性肥料を使用しません。

動物性の肥料も使わない農法は珍しいですが、これは家畜が口にした抗生剤や飼料の農薬があがらの畑や作物を介し、食べた人の体内にまで入ってしまうのを避けるため。

何より、山は動物性肥料がなくてもあれだけ豊かな土壌に育っているのですから要らないですよ？

そのような、微生物の自然のチカラで育まれた土は、植物の本来のチカラを引き出してくれます。

例えば、あがらの薔薇は一般的な食用花と異なり、花びらに苦みが少なくほのかに甘酸っぱさを感じるほど。自然で豊かな香りが強いのも特徴です。

食の安心・安全が担保できるだけでなく、土の中の微生物や植物にとって嬉しく食べておいしいあがらの農法。その基礎となるのが『おいしい土』なのです。

Foster
Delicious
Soil

微生物がつくる『植物性肥料や堆肥』と『炭と草木灰』

『ぼかし』と呼ばれる、昔ながらの植物性肥料をご存知でしょうか。もみ殻や米ぬか、油粕などを、微生物のチカラを借り、発酵させて作ります。たくさんの方の微生物が生きている『ぼかし』は、単なる肥料ではなく、土のバランスを保ち、生きたチカラのある土にしてくれる、あがらにとって欠かせない存在です。

山の落ち葉や地域の雑草を自然発酵させる堆肥や、椎茸を育て終えた『おが屑』からなる菌床の自然発酵堆肥は、人が積み上げ、微生物が分解するという、まさに連携作業の賜物。

地域の間伐材によるバイオマス発電所で役目を終えた「炭や灰」を土に漉き込む。微生物にとっても、嬉しい共生関係によって育まれる

人と大自然がより良い形で手を携え生まれた肥料と堆肥が土を肥やし、あがらの農作物たちの養分となり、元氣いっぱい育った農作物たちは、食べる人々を育む糧になる。そして、わたしたちもいずれ土に還り、他のいのちを育てる肥やしに・・・。

そんな風に、私たちは何億年もの間、一度も途切れることなく、いのちを紡ぎ続けているんです。

All Microbiota
Makes Our
Composts

Column Vol.4 / 冬の間にぼかしをつくる

ぼかし肥料は、冬の間に自分たちで材料を調合し微生物に発酵してもらって作ります。程よく発酵したら、毎日混ぜては広げてを繰り返して乾燥。微生物にとってもあがらのメンバーにとっても、冬の間の大仕事です。

Seventh Generation

過去も現在も未来も薔薇色に

あがらとの取り組みは次なるステージに歩み始めています。

それは『皆が動けば動くほど自分たちの足で立てるようになり、自然を豊かにすればするほど発展する』 仕組み創り。その一歩目として、あがらとでは、自然の理(ことわり)に則した過去の智慧でもある『井田制(せいでんせい)』という年貢を納める制度を『永続的に発展する』仕組みへと活用し始めています。

その成果としては、三尾川という自治区が、県や町の補助がなくても自立するにまでに。

方法はとてもシンプルで、村の方々が薔薇、野菜、お米を『あがらと』と同じ農法で育ててくださり、それを『あがらと』が買い取る。その時に買取金額に一定の割合を上乗せし買取、村に寄付するといった内容です。

今後は、この取り組みを一つの村である自治区から隣の自治区へと広げていき、自律できる地方を生み出していければと考えています。このような地方が増えることが、少し先に必ずやってくる人口減少による地方の崩壊からの都会の崩壊という負の連鎖を防ぐことに繋がると信じているから。そして近年、地球が誕生した時からの摂理が続く限り、エネルギーを生み出すことができる発電技術の特許を取得しました。

このように『利益とリスクのシェア』を行い、自身たちの行いが500年後の7世代先にまで影響を及ぼすことを見据え、そこから俯瞰し逆算しながら日々の目の前のことを一所懸命に向き合い『あがらと』は歩み続けます。環境である『大地』、考えや想いで伝播する『水』、希望や未来である『光』から、『愛』と『情』で成り立つ『やわらぎ(平和)』のその先へ向けて。

この冊子を手にとっていただき、最後までお読みいただき、心より感謝いたします。

あなたは、すべてのいのちと共にあります。

2023.10.8 Agarato Farmers

あがら(=私たち)と一緒に

You Have Already Been a Member of Agarato.
Together With Us = Agarato



あがらとに込めた想い

『あがらと』という社名は和歌山県紀南地方の方言である『あがら』私たちが『と一緒に』の『と』を組み合わせたものです。

私たちは、和歌山の山奥で荒れた土地の草を刈り、耕し、竹でハウスを建てて、微生物と仲良くなり、清流古座川の水に潤してもらいながら、日々たくさんさんのいのちと共に生きています。でも、私たちにできるのは、作物や商品を作り、送り出すところまで。

実際に選んでいただき、食べていただいて、初めて意味をもつと思っています。『あがらと』という社名には、私たちだけでは成し得ない大きなもの『すべてのいのちとみらいを拓く』と

いうビジョンをみんなで形にしたい、という想いが込められています。

野菜作りを教えてください、近所のおかあさん。田んぼの脇を通るたび、声をかけてくれるおじいちゃんおばあちゃん。人と自然に垣根のないこの地で生きていると、人は一人では生きられないことを実感せずにはいられません。

『私たち』だけでは無力だけれど、『私たちと』共にあるすべての人々、すべてのいのちのおかげで、できることがたくさんあるんです。



地球と生きる みんなと笑う